

アトリエ 琉游舎 だより 172号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年2月14日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

雪の果ては涅槃



- 降り納めの雪を「雪の果て」といいます。旧暦で2月はそろそろ暖かくなりその頃降り納めのように降る雪のことです。名残の雪、雪の別れ、忘れ雪、雪の終、涅槃雪とも表します。
- 4月になっても雪が降る年があります。新暦の2月はまだ涅槃雪と呼ぶには早い時期かも知れませんが、ただ立春の翌日に降った今年の雪は、水気を多く含んだ春の雪のようで、翌日も暖かく、道路の雪は凍ることなく、タイヤに踏まれて1日で溶けていきました。
- この時期の雪に春の気配を感じることは、今年の冬が終わるのも早いということかも知れませんが、そういえば大寒の入り翌日に降った雨は、春の到来を予感させるものでした。2週間前の当欄では雨のことを書き、今回は雪のこと。季節がジグザグと変化しているようです。
- 「雪の果ては涅槃」ということわざは、お釈迦様が亡くなったとされる2月15日に行われる涅槃会の法要の頃が、シーズン最後の雪になるとされてきたことが由来です。現代では新暦旧暦が入り交じるなかで季節の言葉が使われ、様々な行事が行われるので、現実の季節感とぴったり合わないことが多いのです。涅槃会も宗派によって、新暦の2月15日に行うところや、旧暦の15日（今年は3月24日のようです）に行うところがあるようです。
- 涅槃はサンスクリット語のニルバーナから音写し漢字に換えた言葉です。生命の火が吹き消された状態、「死」を意味するこの語は、仏教でも最初はお釈迦様の死を意味しましたが、後に「迷いの燃えさかる火を完全に消し悟りに入った境地」を示す言葉となりました。「雪の果ては悟りの境地」そんな春を望む人々の願いが「雪の果ては涅槃」の言葉に託されているのかも知れません。私が願う涅槃は心安らかに豊かにありのままに毎日があり続けられる境地です。今年の春がそんな春であることの願いを、私も雪の果てに込めたいと思います。

2月・3月スケジュール

2月			3月			
月	火	水	木	金	土	日
			15 映画会 13時半から	16	17	18
19	20 読書会 13時半から	21	22 映画会 13時半から	23	24	25
26	27	28	29 映画会 お休み	3月1日	2	3 写経会 13時半から
4	5	6	7 映画会 お休み	8	9	10
11	12 読書会 13時半から	13	14 映画会 お休み	15	16	17

春の彼岸会
涅槃会法要
3月23日(土)
10時半から

読書会
2/20.3/12
(火) 13時半

写経会
3/3 (日)
13時半から

先日久しぶりに東京に行ってきました。電車で通過することは2度ほどあったのですが1泊2日で街の中を歩いたのは、コロナ禍が始まる前年の暮れ2019年の12月以来4年3ヶ月ぶりのことです。4年間という年月はあらゆることが一変してしまうには十分な時間なのでしょう。かつて、地元の間しか歩いていなかった商店街裏通りの古いビルにあるカフェはどこも行列ができ、若者たちが行き交う通りに一変していました。学生の頃友人が下宿していて何度か訪ねたことのあるこの商店街には、今でも住み続けている方がいるはずですが、田舎から4年ぶりに上京してきた私たち夫婦には場違いで居心地の悪い場所でした。駅周辺もビルが次々と建て替えられ、駅構内から乗り換えや地上に出る導線が全く分かりません。18歳から40年間東京で暮らし通勤で使う駅以外では一番利用していたはずのこのターミナル駅周辺の街で、私はもはや異邦人です。

変化の中に身を置いている間はその変化を意識することなく受け入れることができるのでしょうか。東京に慣れ親しんだ40年間の変化を変化とも思わず抵抗感なく順応していたのに、たった4年の空白期間の変化には驚き、ある種の拒絶反応を感じます。私が変化を吸収する若さの柔軟性を失ってしまったから、あるいは変化につきまとう既存の価値観の崩壊を恐れていることが拒絶の理由かも知れません。自然の変化に直面すると心身がついていけず不調のシグナルを発することがあっても、季節がジグザグに行ったり来たりしている内に心身がその変化を受け入れていきます。同様に急激な社会の環境変化もそこに身を置いている内にいつの間にか順応していくと考えれば、これからしばしば東京に出かけてその変化をジグザグに体験して変化と同化していくことも可能でしょうし、その変化を私には無縁のものとして、必要な時は異邦人となって東京を訪問し、異化する私をありのままに観ようとを試みることも可能だと知った貴重な東京滞在でした。

同化と異化を私の仏教理解を語る言葉としてふさわしいかどうかは定かではありません。辞書には、本来生物学の術語で「生物が外界から摂取した各種の物質を素材として、自己に必要な生体内物質を合成する活動を同化、異化はその逆に生体物質を分解する活動をいう。同化作用と異化作用は新陳代謝の二大局面である。」^{注1}と記されています。「変化」は縁起の法則によって今、過去、未来がありのままにあることです。その変化が私と同化したときに私の中に生まれる何か、私と異化作用を起こしたときに私の中から分解される何か、私はその二つの生成と消滅の繰り返しが日々を生活し生きることではないかと考えます。諸行無常の流れの中で私たちは日々同化と異化を繰り返しながら新しいのち(新陳代謝)を繋いでいるのでしょうか。

宮沢賢治の文学は難解と思われ多様な解釈が存在します。その多くは宮沢賢治が熱心な法華経徒、日蓮主義者であること、殊に国柱会(愛国主義を宣揚し満州国建国の思想的支柱なった)のメンバーであったことの信仰背景を排除し、純粹に文字に現れたものを文学的に解釈しようとしたために起きる難解さと多様さです。西欧文学のバックボーンにキリスト教の原理と精神があることは、誰も隠しも否定することもなく、書かれ、読まれています。日本では宗教的なバックボーンは隠すか無視するかのどちらかではないでしょうか。日蓮宗の信徒の唯一の願いは私たちが生きている世界(娑婆)に寂光土(浄土)を築くことです。そのために社会や政治、経済、文化に積極的に関与することが信行一致なのです。宮沢賢治はその願いの実現のために詩人、童話作家、農芸化学者、農村指導者であったのです。これがかれの「行」です。そして言うまでもなく「信」は法華経の教えです。宮沢賢治の詩も童話も法華経の教えを言葉にして伝える試みです。なぜなら「信」は「信」そのものとして言葉では伝えられず、「行」によってのみ伝える(布教)ことが可能なものだからです。彼の文学は布教の言葉であり「行」そのものなのです。恐らく賢治の文学を純粹に文学として読みたい人にはこの言説は受け入れがたいでしょう。しかしかつて何度も挑戦して難解さに途中で投げ出してしまった彼の詩や童話は、今の私には平易で、容易に彼の「行」に共感し同化できるものなのです。

彼の詩集「春と修羅」の「序」、冒頭の言葉です。「わたくしといふ現象は 仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です(あらゆる透明な幽霊の複合体) 風景やみんなといつしよに せはしくせはしく明滅しながら いかにもたしかにとりつづける 因果交流電燈の ひとつの青い照明です」この詩の冒頭は難解といわれて様々な解釈がなされてきました。これは法華経の精神を根底で支える仏教の原理を詩(行)にしたものと私は読みます。「わたくしといふ現象」とは無我であるわたしです。わたしは存在(実体)ではなくわたくしという現象(無我)です。今ここにある無我のわたしを「わたくしという現象」と観ているのです。そのわたしは「仮定された有機交流電燈の ひとつの青い照明」、つまり生成と消滅、同化と異化、プラスとマイナスの間を絶えず行き来する(縁起の法則)ことによってこの世界にいのちを灯し続けるために今ここにあるわたしです。それが「因果交流電燈の ひとつの青い照明です」。仏教原理である「諸行無常」「諸法無我」と法華経の教えである「永遠のいのちを繋ぐ」ために今ここにあるのが「わたくしという現象」です。それは「せはしくせはしく明滅しながら(生成と消滅、同化と異化を繰り返しながら)」「ひとつの青い照明」としてこの世界を灯すのです。そのためにわたくしという現象はいまここにあるのです。

少々賢治の信行について言葉を弄しすぎたかもしれません。信行は言葉では説明不可能な不可思議の現象です。ただそれを私たちはありのままに観れば良いのです。その信行が発する灯火を我が身に照らし合わせて自分の信行を歩めばよいだけです。彼の言葉(信行)が照らし出す因果交流電燈の光がわたしと同化する、あるいは異化する、その時わたしの足下を照らし出す灯りがわたしがありのままに観た(同化し異化した)わたくしという現象なのです。